

川 根 本 町

2025年9月号

図 書 室 だ よ り

9月

- ・文化会館図書室(小長井)
- ・山村開発センター図書室(上長尾)
- ・移動図書館車やまびこ号:川根本町内6コース
- TEL:0547-59-3106(文化会館)
- TEL:0547-56-2231(山村開発センター)

- ☆ 開室時間:午前9時～午後5時
- ☆ 休室日:月曜日・第3日曜日(21日)
- 祝日の翌日(16日・24日)
- ☆ やまびこ号巡回6コース



かわねフォン、町のホームページでご確認いただけます。
なお、年間予定表は図書室で配布しています。

新着 図書



「川根本町インターネット図書室」では
新刊の詳しい情報や 蔵書の検索が可能です。



川根本町
インターネット
図書室
ホームページ

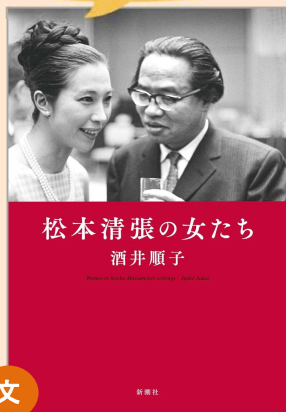
季節の不調が
内側からととのう



文

瀧本靖子 著
有隣堂

作家の内面に迫る



文

酒井順子 著
新潮社

子どもの暴言には
ユーモアで切り替えます



山

あたたたたー 著
学芸みらい社

励まされてきた
「二十四の名言」



山

黒柳徹子 著
新潮社

あなたの本



文

ノラ・ニッカム 作
ロバート・メガンク 絵
フレール館

山の木、 とどは!



文

キッチンミノル 作
テキサスブックセラーズ



山

永井郁子 作絵
寺村輝夫 原案
あかね書房



山

小賀野実 写真
山中則江 写真
ポプラ社

※所蔵状況 文 文化会館図書室 山 山村開発センター図書室

◎ 新着図書

「川根本町インターネット図書室」では新刊の詳しい情報や蔵書の検索が可能です。

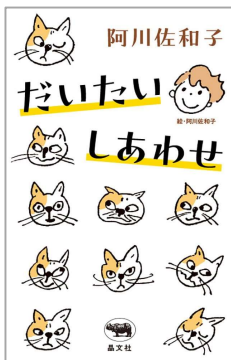
文化会館図書室所蔵	山村開発センター図書室所蔵
<p>● 『妻はりんごを食べない』 瀧羽麻子 著 幻冬舎</p> <p>40代に入った小川暁生は、妻と二人の生活を気に入っている。ところがある日、妻が実家に行ったきり、戻ってこない。彼女の実家を皮切りに、彼女に縁のある場所を探る暁生だったが、どこへ行っても、彼女は気配だけ残し、姿は無い。穏やかすぎる夫婦に突然訪れた、愛のゆらぎの物語。</p>	<p>● 『サイレントシンガー』</p> <p>小川洋子 著 文藝春秋</p> <p>内気な人々が集まって暮らす“アカシアの野辺”。野辺の人々は沈黙を愛し、十本の指を駆使した指言葉でつましく会話をした。リリカもまた、言葉を話す前に指言葉を覚えた。やがてリリカは歌うことを覚え…。果たして、リリカの歌はどこへと向かっていくのか？</p>
<p>● 『アンスピリチュアル』 高野史緒 著 早川書房</p> <p>平凡なパート主婦の祝子は人のオーラが「見える」からこそスピリチュアルを信じない。いんちきは分かってしまうからだ。が、繁華街で祝子の能力を見抜いた占い師に、職場で祝子にもオーラを視ることができない理学療法士に出会い、運命は足元から崩れてゆく。</p>	<p>● 『烈風を斬れ』 砂原浩太朗 著 双葉社</p> <p>豊臣秀次の遺児である孫七郎は、「大坂の陣」前夜、大坂方の密使として全国に散らばる牢人たちを説得する役目を受け、紀州・九度山に蟄居する真田幸村のもとに向かった。なぜ父や兄弟たちは無残な死を遂げたのか、己は何者なのか。戦国の烈風にさらされながらも、前を向き歩く若者たちの物語。</p>
<p>● 『クロエとオオエ』 有川ひろ 著 講談社</p> <p>横浜で三大続いた宝石商(ジュエラー)の嫡男・大江頼任と、彫金を家業とする職人の娘・黒江彩。最初のデートで頼任が贈ったリングを突き返してから、二人の関係は「メシ友」と「恋人」の間で謎のままだが…。ド直球のお仕事ラブコメ。</p>	<p>● 『不等辺五角形』 貫井徳郎 著 東京創元社</p> <p>避暑地の別荘に集まった幼馴染み5人のうち、ひとりが死体となって発見され、ひとりが警察に連行された。5人の間に何があったのか？ 関係者の証言から展開される、息を呑む心理劇の結末は…。</p>
<p>● 『一撃のお姫さま』 島本理生 著 文藝春秋</p> <p>歌舞伎町が舞台のアニメ主題歌の仕事を受けた、アーティストの睡。音ゲーの配信者兼会社員の友人から、曲作りのためホストに通うことを提案され…。表題作など全5編を収録。</p>	<p>● 『麦本三步の好きなもの 第3集』</p> <p>住野よる 著 幻冬舎</p> <p>図書館勤務の20代女性・麦本三步。少しずつ成長しながら、変わらない日常を過ごしていくと思いきや、まさかの岐路に！？心温まる大人気シリーズ、決断の最新刊！</p>

おすすめ図書

『だいたいしあわせ』

阿川佐和子 著・絵 晶文社

アガワ流 心の湿布薬



古稀(70歳)を超えられた阿川佐和子さんのエッセイ本です。阿川さんは、作家、エッセイスト、キャスター、俳優としても活躍しておりこれまでも数多くの小説やエッセイを出版されています。エッセイとは、実体験や人から聞いた話をもとに、自分の考えや思いを文章にまとめたもの。本書は、約1年間にわたり地方紙に連載された56話を厳選し、各話は2ページ程度にまとめられています。内容は、こども時代の思い出や父とのやりとり、能登での体験、自身の髪の毛のセルフカット、初恋の苦い話など一笑いあり涙ありの、日々のささやかな出来事が描かれています。また、イラストは阿川さん自身が描いており、こちらも見どころです。私が共感したのは、「電子音生活」「電子化不安」の話題。「そうそう、わかる～」とうなずいてしまいました。

「この本を読んだ方々が一瞬でも心を和ませてくだされば、それだけでありがたい。」と語る阿川さん。日常を楽しく前向きに過ごすコツが満載の、読む人に元気を与えてくれる1冊だと思います。

図書室スタッフN

文化会館図書室所蔵